
獣人世界の異邦人

猫馬鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獣人世界の異邦人

【NZコード】

N4918Z

【作者名】

猫馬鹿

【あらすじ】

目が覚めたらネコミミ付きのオッサンに囮まれてた。・・・何じゃそりやあ！一番近くに見えた町に入つてみればいきなり犯罪者扱いされるわ、国の戦争に巻き込まれるわ、帰る方法は解らないわ・・・

- ・ ヤメツ！考えるのヤメツ！まずは寝所と飯だ。話はそれからだ！

これは本人の知らないうちに異世界トリップをしてしまった少年倉橋宗一郎（一応主人公 本業傭兵、副業高校一年生）と彼の仲間たちの物語である。
*処女作になります。拙い文や駄文になるか

と思いますが読んでいただけた幸いです。以前間違つて短編で投稿してしまったので連載として再投稿させていただきます。2011/12/18 いろいろあってタグを変更しました。

目が覚めたらネーム///親父に呪まれた（前書き）

以前投稿した分が間違つて短編で出てました。申し訳ありませんが、
こつちが本編です。

目が覚めたらネ「///」親父に囲まれてた

俺は全力で逃げていた。

ん? 何から逃げるかつて? まあいい、聞いてくれ。

俺は自宅の有る町の端の方にある山にいった。

寝るのにちょうどよさそうな木を見つけたので、木に寄りかかって少し昼寝することにした。

目が覚めるといつ之間にやら十人ほどのオッサンに囲まれていた。なぜか鉄製の檜を突きつけられるおまけ付きでだ。

オッサンどもは皆同じ格好だった。

ドクエ辺りに出てきそつな皮の鎧を着ていた。

- それはまだいい -

下卑た笑いを浮かべながら、「おとなしくじる。怪しい奴め」とかいつてたが。

- 何故かバリバリ日本語話してんだが・・・気にするな問題はそこじゃない -

しかも全員が全員やたらと俺の尻を血走った目で見てている。

- もしかしながらも貞操の危機か? どんだけ欲求不満なんだよこいつ等は! 穴なら何でもいいんかい! ・・・しかし一番アレなのはそこじゃない -

口口まで聞くだけならコスプレ趣味のゲイ親父が集団でいるだけだ。悪いがその程度なら叩き潰して終わりである。自慢じゃないが我ながら波乱万丈な人生送ってるんだ。その程度なら慣れっこである。無論、無傷で切り抜けるくらいは造作もない。なんでかつて? 言わせんなよ恥ずかしい。

・ ・・話が逸れた様だ。要するに何が原因で全力で逃げるハメになつたか。

ソレは・・・アレだ。オッサンどもに付いてるペロペロ動くネコ//ミとネコ//ぽだ。

・・・ソレがどうしたって？

馬鹿野郎！オッサンにネコ///付けてもキモいだけだろ？
しかもゲイだぞ？ゲイ。

悪いが俺は同性愛に理解はない！男同士ならなおさらだ。

しかもネコ///動いてんだぞ？どういう訳かマジで本物臭いし・・・
以上の理由から俺は逃走することを決めた。なぜならキモ過ぎな上
に貞操の危機のおまけ付だ。

想像してみて欲しい。トロルみたいなオッサンがネコ///ロスプレー
して血走った目で自分の尻見てんだぜ？もう雌に種付けする直前の
雄犬みたいな目でだ。むっちゃ凝視しどるがな！

そりや逃げるよくてえか逃げる以外の選択が無いわ！

そう判断した俺は懐から携帯のカメラでフラッシュをかまして、妖
怪ネコ///親父（仮）がひるんだ瞬間に全力で逃走した。

そして、冒頭にいたるという訳なんだが・・・一言言わせて欲しい。
「どうなつてんのか誰か説明しろ！チックショー――」

目が覚めたらネ「///」/親父に醒まれた（後書き）

拙い文ですがこれからも読んでいただけると幸いです。

在る少年の数時間前の日常（前書き）

今回は宗一郎が異世界に迷い込む数時間前のお話です。

在る少年の数時間前の日常

・・・話は数時間前に遡る・・・

「はああああ。やはり猫はいいなあ・・・。癒される。」

俺は教室で雑誌を読みふけっていた。（ちなみに読んでる雑誌は月刊猫の友五月号だ）

現在、絶賛授業中なのだが新学期（つゝても出席日数足りなくて留年してるが）なので気にしない。

理由なんぞ言つまでも無い。過去受けた授業なんぞ聞く気が無いからだ。

ちなみに去年の成績自体は中の上だったりする。出席日数自体が足りなかつたから留年しただけだ。

・・・まあその事で半ギレの義姉あねには殺されかけたが・・・いや忘れよ。アレは黒歴史だ。

「はい、今日は授業はここまで。明日はこの続きからだから予習しどけよ。」

授業を担当していた教師はそういうて教室から出て行つた。やつと授業が終わつたようだ。

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴つた。現在六時限目だから今日はここで終わりだ。席を立とつとした時、知り合いが近づいてきた。

「宗一郎、また授業中に雑誌読んでただる。」

こいつの名は相良礼一。180程度の身長に黒田黒髪、顔は一枚目半で体形はいわゆる細マツチヨだ。

我が友人にして戦友、共に現在日本唯一のPMCに籍を置くれつとした傭兵だ。

傭兵会社

「別にかまわんだろ？」一度も同じ内容聞く気無いしな。そんな暇あつたら猫ながめとく方が精神にいいからな。んで、用件は？」

「・・・まあいいか。隊長どのから連絡だ。しばらく待機だとよ。いつでも出れるよう準備はしとけとよ。」

「ふーん。近い内にまたテロ組織制圧戦でもやるのかね？俺としては大歓迎だがな。ここにいると腐つちまいそうだ。」

「・・・まだお前はこっちの生活には慣れないのか？」

「まあな。五年近くゲリラやってりやあこの国は平和すぎらあ。っこ卒業したら本格的に傭兵になるかね。一番手馴れてるしな。」

「おいおい、瑞樹姐さんが泣くぞ？ いい加減血生臭い世界から足洗えってな。」

「関係ないな。俺はすでに壊れてるからな。それに殴り合いならともかく殺し合いなら俺が勝つ。」

「はあ・・・俺みたいに家庭の事情で傭兵をやりざるを得ないならまだしもお前は違うだろ？ おじさんもいつてたんだうつ。いつでも辞めていいって。」

「？なにを勘違いしてるんだ？ 俺は好きで傭兵やってんだよ。おじさん義父には悪いが、ね。少なくとも今は、そういう世界に足つっこんどかねえと正気が保てんよ。あと猫力フェな。アレが無いと正直この生活キツイわ。」

「さらつと妙な物混ぜるなよ。お前が猫馬鹿なのはよく解つてるから。てか猫力フェと戦場同列に並べんな。まったく方向性が違うだろうが。」

「俺にはどっちも必要なんだよ。刺激をくれる戦場と癒しをくれる猫はな。用件はそれだけか？ んじゃ俺は帰るぜ。」

俺は席を立ち教室から出た。

あ・・姉さんになんて言おう・・・

宗一郎が立ち去った後、俺はため息をついた。

宗一郎の事情を知らない奴から見ればあいつはイカれた戦争狂にしか見えない。ソレは紛れも無い事実だ。

だが、偶然にも俺は知ってしまった。知つている以上見てみぬ振りするわけにもいかない。主に個人的な理由で、だ。

まず、俺が死にたくない。傭兵会社PMCの仕事中、俺と宗一郎は歳が同じことも有りよくコンビを組まされるのだが、宗一郎は拳銃しか使わない変わり者だ。マシンガンやアサルトライフルは意地でも使わない。

間違えなく変人の類だ。射程にせよ面制圧力にせよ拳銃は前記の二つには遠く及ばない。

射程ではアサルトライフルに、面制圧力では両方にそれぞれ劣っている。

現在の軍隊やテロリストがメインで使つている銃器は上記の一種類だ。

とこうことはだ。戦う場合、相手の射程内に入る事が大前提となる。俺ごと、弾丸の雨の中に飛び込むのだ。いつ流れ弾で死んでもおかしくない。

もう一つは・・・まあアレだ。あいつの姉貴に頼まれたのだ。

それもあるがあの人を泣かせたくない。主に身の危険的な意味で・・・。

「ま、がんばりますかね。将来の弟君（仮）の為に・・・つと」

俺は瑞樹の姉さんと合流するため町に繰り出した。

相良礼一 視点 終了

「はあああ。あの人義姉にも困ったもんだ。さてどうするかね？」

俺は当てもなく町を流離つていた。

言いたいことは解るのだ。

ゲリラをやつっていたのは必要に迫られたからだ。出来なければ俺が殺されるか死ぬまで慰み物にされているかどちらかだったからだ。発展途上国の反政府ゲリラなぞそんなものだ。

獸性むき出しで殺しあうのが戦争というものだ。ゆえに紳士の軍隊やゲリラはない。

唯一の救いはそのゲリラが圧政を敷く独裁政権に対する反政府レジスタンスだつた事ぐらいだろう。

まあそうだとしても前記の通りな点に変わりは無い。卑怯だの外道だの罵る奴もいるだろうが、そいつは頭があめでたいのだろう。正々堂々なんて方法が取れる奴は力が強い奴だけだ。弱い奴が強い奴に勝とうとするなら手段を選んでる余裕は無い。戦いは勝たなければ意味が無いのだから。負ければ全て失い踏みにじられるだけなのだから。

話を戻そう。要するにそんな環境で生きてきた人間の価値観は平和な国で生きてきた人間にとつてはひどく歪んでいるのだろう。後者である義姉は前者である俺を後者の価値観に矯正したいのだろう。まあ、あそこに着いたばかりの俺ならともかく今の俺には何をしても無駄だが。現に今も似たような事してる訳だし。辞めさせたいんだろうなあ。まあ生の実感つて奴を得られん生き方なぞ今更御免こうむるが。

「さて、どうするかねえ・・・。義姉貴と顔合わせてもいつも通り説教と格闘戦にしかならんだろうし・・・」

前にも言つたが殺し合いなら勝機は十分ある。信じられないかもしれないが、義姉に格闘戦で勝てる奴など少数派だ。ぶつちやけた話、世界クラスの上から二十人ぐらいだろう。「冗談抜きで化け物だ。強いて言うなら殺し合いの経験が無いことぐらいしか救いが無い。まあそれゆえに殺し合いなら俺が勝つという話になるのだが。必要な

モノがまるで違つし。

「・・・山にでも行くか。久しぶりに黄雀て来よつ。今日は野喰だな。荷物取つてこねえと・・・」

俺は久しぶりに町の西端から山に登る事にした。
その選択がどういう事になるのかも知らずに。

在る少年の数時間前の日常（後書き）

近いうちに登場人物紹介書こうか思案中です。そのうち番外編扱いで書こうかと思いますが、宗一郎君の過去は地味に重めです。

某漫画の花のコードネームの犯罪請負人みたいなやつです。瑞樹さんはもうちょっと先に登場させる予定。礼二君も再登場は同じ位を予定しています。

じつあんせんメソッドから情報収集を試みてみた。殺戮せきり。（前書き）

今回は初の戦闘です。

「うわあ、うわあ、うわあ、ここまで来りやあしばらく時間は稼げるだろ。」

「あれから數十分逃げ続けネコ///親父を撒くことに成功した。
しかしここは何処だ？寝てる間に拉致られたのか？あの山はそんな
に標高高くないし、もう麓まで来ててもおかしくないはずなんだが。
・・ん？なんで視界に海が見えてんだ？俺の家はY県にあるんだが
？内陸県なんだが？・・もういいだろう。そう考えるしかないみ
たいだし。

「・・・コレは異世界つて奴か？マジで？」

自問自答してみる。まあ答えは明白すぎるんだがな。信じらんない
し。

「・・・さて犯罪者ルートか勇者ルートかどっちだろって、間違
いなく前者だよなあ・・・」

後者なら「ケツ掘らせろゴルア」な視線なぞむけんだらう。仮にも
何か倒して来いつて奴らだ。普通に考えて持ち上げておいて利用す
るのが正解つてもんだ。まあ奴隸契約かまして隸属を強制させり
て場合もあるか。

「装備の確認しどくか。戻り方知らんし、最悪逃亡生活だしな。」

「ふむ、テント張る前に居眠りしたのが幸いしたな。
俺の前にずらりと野営装備が並んでいた。

テント（最新の小型に折りたためる代物だ）にコンロ（缶のガスで
火を出すタイプ）にフライパンにカレーの食材（肉、人参、玉葱、
ジャガイモ、米少量）あとは鍋にランタンにアーミーナイフにライ
ター。最低限必要なものはそろっているようだ。

「武器はCZ75にコルトパインソン4インチにベレッタM92Fか。

我ながら趣味に走った装備だな。

弾丸は9mmパラベラムが・・・100コマ、ガジンフル装填でそれぞれ10、リローダー付きのマグナム弾が6セットか。基本はナイフで行かないとまずいか?「

ん?なんでんな物騒な物持つてるかつて?用心だよ、用心。サツに見つからないようにすれば問題ねえよ。傭兵ライセンス持ちだしな。拳銃(実弾MAX装填済み)以外は全部リュックサックに詰め込んでもつてきた。拳銃は服で隠して持つてた。

「装備も確認できた。んじゃ、あの妖怪何人か締めて情報吐かせるとするか。」

俺は妖怪ネコ///親父を狩る準備を始めた。

-数分後-

まあ予想通りといえば予想通りに妖怪(?)たちはやってきた。

「しつかしあのガキどこいきやがつた。」

「まったくだぜ。久しづりに肉穴でヌけるかと思つてたのによ。」

「まあいいじやねえか。こんなところにいるんだ。すぐに捕まえられんだろう。」

下卑た笑みと欲情に塗れた目をしながらネコ///親父たちが歩いてきた。

俺は腰をしかけた場所の近くの木の上に上がり妖怪どもを見ていた。「あいつらも温いねえ。俺がただで犯されるタマとでも思つてんのかね?」

だつたら教育してやるわ。命という対価を持つて。誰を相手にしているのかという事を。教育

じゃあ始めよう。皆殺しの時間だ。

「うおつー。」

「ん?どーしたんだよ?」

「いや、なんか草に足引っ掛けたみたいで・・・」

俺は先頭に立つてた妖怪？が俺の仕掛けた罠（草の先端を結んだだけ。時間無かつたからな。）に引っかかったのを契機に妖怪どもに襲い掛かった。

罠に掛けた妖怪？に向けて木の上から落ちる。首にナイフを叩き込み、そのまま貫通させた。まあ確実に死んだな。コレで一体。

「ツ！このガキイイイイイー！」

槍を持った妖怪？が俺を貫こうと突きを放つ。しかしそんな見え見えの攻撃なんぞ当たらない。俺に当たらないなら弾幕ぐらい張れっての。横によけると同時に逆の手に持ったM92Fを発砲する。三点バーストで放つた銃弾は前にいた妖怪？三体の眉間に貫き絶命させる。これで四体。

「くつなんだそりやあ！んな武器ありかよつ！」

一番後ろにいた妖怪？が叫ぶ。はあ？あいつら拳銃も知らんのか？

ターンターンと銃声を鳴らしながら妖怪どもを始末していく。戦闘が始まつてから物の数秒で生きている妖怪？は一体になつていた。
「さて、覚悟はいいか変態オヤジ。とりあえず吐くモノ吐いて死ぬか、それとも今すぐ死ぬか好きな方を選べ。まあ逃げた所で拷問が追加されるぐらいだがなあ。」

そう言いながら俺はM92Fを一人生き残つた妖怪？に向ける。

「うおおおおおおお！！！」

向けられたM92Fにかまわず、妖怪？は槍を振り上げて突進してきた。

「じゃあな 变態！」

パアン

銃声と共に発砲された9mmパラベラム弾が妖怪？の眉間に穴を穿つた。

とつあえずメロリヤホヤジから情報収集を試みてみた。殺戮付きだ。（後書き）

ちなみに何故、宗一郎が武器を持ったのか?って疑問は出ると思いますが、用は野生動物狩つて喰う気だったからが作者からの返答です。喰い盛りですしねw

まあ普段から常備してたりしますが。

あと、なんで散弾銃じゃないのか?って突っ込まれるかと思いますが、彼は拳銃以外銃は使わない変人なので。CZ75は初回生産品でゲリラやってた時の彼の兄貴分の形見です。パインソントM92Fは中古品です。

町を見つけたので降りてみた（前書き）

言いたい事が中々いえないのが世の中というものですね。
ええ、某県は法律守らない会社多過ぎとか言えないです。 言つだけ
労力の無駄だから。
・・・なんか疲れてるなあ・・・俺・・・

町を見つけたので降りてみた

「殺しちまつた……どうしよ?」

俺は後悔していた。

殺したことに関してではない。

情報を聞き出す（なかば拷問する）ことで憂さ晴らししたかった事は認める）事が出来なかつたからだ。

「ま、異世界の金も持つて無いし、追い剥ぎしつくか

俺は妖怪？の衣服から嬪々として金を探すのだった。

「ふーむ、大漁大漁。しかしながら金貨とか使ってんのかよ。持ち運ぶのメンンドいんだけどな。」

銅貨、銀貨、金貨それぞれ各十枚を略奪し、俺はちょっと気分が晴れた。

さて、剥ぐ物剥いだし妖怪？どもの死体は放置でいいか。

ん？ゾンビにでもなるんじやねえの？って？そんときはそんときだ。それより今はやらなきゃならんことがある。現在地の把握と近くの人の住む町の位置の確認だ。

そんなに時間が掛からなかつた。

今居る山の麓に大きな町が見えた。ただしでつかい城の周囲に有る
というおまけ付きで、だが。

「まさか、アレは王都つて奴か？」

俺の予想は当たつてゐる気ががする。何せ城がデカイのだ。

「ふむ、とりあえずアソコにいってみますか。トラブルは基本と考

સુધીની

犯罪者扱いを前提に動かないといろいろ痛い目見そうだな。勇者とかなら城に召喚されるだろ？」

「で、降りてきた訳なんだが・・・・」J-1まで予想通りだと逆につまらんな。」

おひんた「

はい、予想通りエントリーです。門番のおにわんに絶賛槍向けられてる最中です。

やつぱりと言つかなんと言つが判断に困るな」これは、二つの意味で

「はまあ予想通り、不審者+犯罪者探しの二三歩です。俺が何したよ？遠巻きにみてるギャラリーがうざい。てか当然だらうといわんばかりの視線を向けてくる。言うだけ無駄な空気だ。

もう一つは、門番のおっさんだ。こいつらはさつきの妖怪? ネンンン

この世界は獣耳＆しつぽ装備がスタンダードなのか？異世界行くんならフニャードが良かつたわ！！予想はしてたが、扱い悪すぎ&疎外感強すぎだろ？コレ。異世界人には優しくしろよマジで。

「一応聞きたいんだが・・・なんで俺に槍向てるんだ？俺なんかしたか？」

無駄だとは解つているが一応聞いておく。犬耳オヤジ（仮）の人様見下すような視線にいい加減に頭きたし。

「ふんっ！なにを白々しい事を言つているのだ？・・・まあいい、無知な貴様に教えてやろう。貴様には耳も尾も無い。ソレはこの世界においてどこかの国で国外追放以上の罰を受けたものの証だ。犯罪者を町に入れないようにするのは治安維持の基本だろうが。」

犯罪者認定キタアー！まあ予想通りちゃあ予想通りだな。ただ言い方が上から目線過ぎて気にいらねえ。コレはあれか？この國滅ぼして玉座に座れつてお告げか？最初からんなもん無いわ！（獣耳＆しつぽ的な意味で）

「早急に立ち去れ。初対面だからな。生きることぐらいは認めてやろ？まあ罪人がどこで野垂れ死のうが知つたこっちゃないがなあ！はははははっ！！」

プツチーン

何かがキれた。最近碌な事なかつたし、義姉はつるさいし、何もして無いのに入非人扱いだし・・・キれていいよな？

俺は瞬時に後ろへ飛び、同時に懐からCZ75とM92Fを取り出して構える。

「おっさん。無知な俺から忠告だ。そんなもの槍向けた以上、殺されたつて文句は言えないんだぜ？あと獣耳だのしつぽだのそんなもん産まれた時からねえよ。」

俺の忠告に道化師を見るかの様に笑いながら犬耳オヤジ（仮）が喋つた。

「ほう？いい度胸だ。そんな玩具おもちゃで俺を殺すと？面白い冗談だ。」

・・・どうもこの犬耳オヤジ（仮）は死にたいらしい。よほどの馬

鹿なのだろう。殺氣にも気付かないと。

「やかましいんだよ。いちいち人様見下してんじゃねえよ。第一おっさんに獸耳とか付けてんじゃねえ。気持ち悪いだけだろうが。それはアレか？お前の存在自体が俺に喧嘩売つてんのか？」
てか、アレは小動物好き全員を冒涜してるよなあ？少なくとも俺はそう思う。

「きつ貴様ー！－！誇り高きウルフ家の人間に何たる無礼な！」
犬耳オヤジが叫ぶ。自分の物言い棚に上げてなにいつてんだ？てかあんなに礼儀のなってない程度の低いのが貴族かよwどんだけ人材？たりてねえんだ？この国。

「はつ！初対面の人間に何様気取りで暴言吐いといて言つことがそれかよ。このテンプレ落ちこぼれ貴族が！貴族なら貴族らしく王宮にでも籠つてろや！まあ、こんなところでこんな事してる時点で身分も教養の程度もしれるつてもんだがなあ！」

左手の中指を立てて挑発してやる。

貴族でおっさんで門番つてどんだけ落ちこぼれなんだよ、このクソ貴族は。

んーやつぱストレス溜まつてたんだなあ俺・・・。碌な人生歩んでなかつたし。公職の人間に初対面でコレだし。

言いたい放題言うつて気分いいなあ！ほら、こひよ。存分に惨たらしく殺してやるからよお！

「キツキサマー！－！罪人の分際でえ！殺してやる、殺してやるぞー

！－！」

犬耳貴族？が槍を振りかぶつて突進してきた。おーし来い。惨たらしく撃ち殺してやる。

しかし世の中そは問屋が卸さないもんである。

「そこまでにしなさい！－！何の騒ぎですか？！－！これは！－！」

金髪で狐耳＆しっぽ装備の軍服らしい服きた女の子が、犬耳貴族の後ろから大声を上げて犬耳貴族？を静止した。

「・・・今度は何だよ・・・・・」

俺は「また面倒くさいことになりそうだなあ」と盛大にため息をついた。

町を見つけたので降りてみた（後書き）

宗一郎は実は都 真 氏のファンといつ裏設定があるのでちと出しつきました。

ちなみに作者もファンです。TV版な はは認めませんが。
D G A S の第一期は早めにやって欲しいものです。
金髪さんは次話から本格的に出る事になります。
彼女の正体は何物なのか？詳しくは次話で。

予想通り面倒な事になつてきました。（前書き）

金髪さんの詳細は次話待ちになりました。

あと解つていいとは思いますが金髪＝狐耳です。

ちなみに作中のこの国はメ フ ル王国（解る人いるかな？）がモ
デルになつていたりします。主に地理的に。

予想通り面倒な事になつてきた。

いつもアノ狐耳さんは都市の警備の責任者の様だ。

目の前の犬耳貴族？（たしかウルフとか言つたつけっどいつ見ても犬耳なんだが？）に事情聴取中だ。

「ふーん。重罪人に都市に入るなつて警告したら反抗されたと。」
狐耳さんの発言から自分の発言や行動は大方、棚に上げているようだ。

はあ、やだやだ。俗に言つ馬鹿貴族の様だ。面倒くさいな。殺しちゃおうかな？このクソ犬。

「ええ、仮にも貴族である私に数々の暴言を吐き、手打ちにしようとしたところにナインテイル卿がいらつしゃつた訳でして……ふむ、あの狐耳娘、ナインテイルとかいう家名なのか。九尾の狐意識してんだろうな。狐だけに。

しかし、見事なまでの長身（といつても168cmぐらい）と金髪ボンキユツボン！だなあの狐耳。トラウマが疼くなあ……。
一応言つとくが俺は口 ロンじやねえぞ？ああいう容姿の女にいろいろされただけだ。

・・・一年たつた今でも未だに悪夢としてみるくらいのわかつこトラウマになつてるけどな……。

数分たつた。いまだに事情聴取は続いてる。今度は周辺のギャラリーに対してだ。

しかし・・・見苦しいな。あの犬。やっぱ殺さないまでも締めるか。

こつちチラチラ見ながら一ヤついてやがるし。
俺は懐から「ルトパインソンを抜き、照準を犬耳貴族に合わせる。
そのまま頭（一応全身鎧と着てる。魔村の主人公が着てるような奴を。）を掠めるように発砲する。

ダーンと銃声が響く。犬耳の兜を貫通し、少し側頭部を切り裂いたようだ。側頭部が露出し、少し血がでていた。

「やっぱ血は赤いんだな。青かつたらちょっと引いてたな。

「ツツツ！何してるんですか？！－あなたは－！」

狐耳が叫ぶが聞く耳なぞもたん。未だに当事者である俺に事情聴取してない時点での、こっちの言い分など聞く気は無いのだろう事が丸解りだ。よつて・・・

「ああつ？最初から殺す氣満々の相手になんて遠慮しなけりやならないんだ？ついでに言つなら今はただの警告だ。殺す氣なら眉間に鉛玉ぶちこんでるわ。なんでこんな話になるのかは言わなくとも解るわな？」「レで解らないなら正直、頭にウジ沸いてないか疑うところだぞ？」

ほんと頼むよ？マジで。いい加減、キリングマッシュイーンに戻っちゃいそうだ。

考えても見て欲しい。仮にもすぐそこにいる片方の当事者への事情聴取より周辺の見物人への事情聴取を優先するなど、「あきらかにこっちの言い分など聞く気は無い」と公言しているようなものだ。今までの対応から見てもコイツ等的には（少なくとも俺には）「不敬罪（といふか貴族に立て付く）」＝「死刑」なのは間違えない。違うなら困んで捕獲にかかるだろう。裁かなきやいかんしな。この世界規模で「獸耳としつぽが無い人間」が「人間」扱いされてないとは犬耳貴族の弁。

となりや、殺す事に罪悪感もクソも無いだろう。虫を潰すのと同じだ。人間とは同族以外（まあ場合によつては同族相手でも）には限り無く残酷になれるのだから。むしろ「民衆を守るため私達は手を汚した」とか妙な自己陶酔してそつだ。

ならば、こちらはいつでもお前らを殺せる事を教えておく方がいいだろう。警戒させて動きを鈍らせることにする。そういう意味での

「警告」だ。

「・・・なんでそつなるのかとなんで今の行動に繋がるのかが解りませんが？」

狐耳・・・仮にも指揮官だろ？おまえ・・・大丈夫か？いろんな意味で。

俺は盛大に溜め息をついた。

「はあああ・・・いや悪かった。この国の貴族の教養レベルって俺が信じられないぐらい低かつたんだな。まさか本気でこんな簡単な問題も解らないとは思つてなかつたわ。」

嘲笑をこめた顔で狐耳を見る。

「ななななつなんですつてえ！！」

キれる狐耳。まあこの国の貴族全員「愚者」呼ばわりしたも同然だからな。プライド高い貴族サマならそらキれるわ。解つてていったんだけだね。

心底、面倒くさいが一応解説してやることにした。無論、自分の為にだが。

「いいか？仮にももう片方の当事者に事情を聞かないなんぞ「お前の言い分は聞く氣無い」と公言してるようなものだぞ？ましてやソコの犬耳貴族「狼だつ！」うるさい。どう見ても犬だろうが。つと、犬耳貴族は問答無用で槍向けてくるわ、好き勝手暴言吐いて人非人扱いだわ、だ。最初からこつちを殺す氣だと思われてもしかたないだろ？殺そうとするんなら殺される覚悟もしつけよ。それともあれか？貴族サマ（ちょっと馬鹿にするユアンス混ぜながら）にとかちやあ王族とか以外は奴隸同然。人とみなさないつて口か？いつか平民に反乱起こされるぞ？そんでお前等の人生は悲惨の一言になるんだろうな。具体的にいうと（R-18発言のオンパレードなので自主規制）で（再び自主規制）だな。いままでそんな態度で好き勝手やつてた分、さぞかし惨たらしく行われるだろうな。具体的には（再び自主規制。鬼畜すぎて。）で（やっぱり自主規制）つてとこか。」

「ここまで言つてやつと狐耳は自分の失策に気付いたよつだ。しかし、さすがは貴族サマ、即座に首に掛けっていた笛を吹く。ちつー・増援呼びやがつたか。

城壁（RPGとかの都市部を思い出していただければ解りやすいかと）の内側からわらわらとネコミミ+槍+皮鎧装備のオッサン方が沸いてきた。その数約30。

自分の部下の出撃を確認すると、狐耳は大きく声を上げた。

「・・・此処でこの者を処刑します。罪状は国家反逆罪および国家侮辱罪および貴族への不敬罪、加えて思想犯の疑い有り、です。掛かれつ！」

狐耳は脇に挿していたサーベルを抜き、その切つ先を俺に向ける。

・・・ありがたいねえ、存分に殺して壊して犯して蹂躪してやるよ。俺の脳裏に暗い欲望が宿る。ああ、いいな。こいつのを待つてたんだよ。

さあ、殺し合^{踊らう}おつぜえ。どっちかがくたばるまでなあつ！

しかし、やつぱりそつは問屋が卸さないのが世の中といつものである。誰か仕組んでないか疑いたくなるくらいには。

「やめんかつ！馬鹿者どもがつ！…これ以上見苦しい真似をするなつ！」

いきなり横から大音量の罵倒が響く。

そちらの方を向くと一人の男が立つていた。

見た目で判断するなら、歳は俺と同年代、体格も一般人にしては鍛えているといえる程度の肉体にやや高め（目算で177といつたところだ）の身長、軍の仕官が着るような力チカチの軍服を着ている。ちなみに黒髪黒眼で虎縞のネコミミ+しっぽ付きだ。

俺は誰だ？あれ？ぐらにしか思わなかつたが、目の前の狐耳は顔を真つ青にしていた。

え？もしかして偉い人？と俺が疑問に思つたとき、狐耳が叫んだ。

「へつ陛下！…どうしてこちらに？！」

陛下・・・だと？もしかして・・・王族つて奴ですか？

俺はひたすらいつござりするのだった。

予想通り面倒な事になつてきました。（後書き）

今回も前回と同じような終わりになつてしましました。

今回のこのイベント起こしかないと、話が進まないんで。今のこの段階では金髪さんはまだモブキャラ扱いです。本編が始まることにメインに昇格を予定しています。

作中で金髪さんも宗一郎がいいたい事は理解しているのですが、この世界の「常識」的には理解できないといったところが正解です。彼女にもいろいろ事情というものがあるのでから。では、引き続き、この「獣人世界の異邦人」をお読みいただけた幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4918z/>

獣人世界の異邦人

2011年12月21日13時56分発行